



## 大学における体育の課題



石手 靖

体育研究所 所長

### 所長挨拶

この度、2017年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究レポートを発行することができました。発行に際しご尽力頂きました関係の皆様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。体育研究所では、2012年度より所員個々の研究と並行して、大学における体育の課題として、「大学体育教員の使命」、「スポーツにおける大学と地域の連携」、「大学における競技スポーツ」を取り上げ、その課題解決に向けた基盤研究を立ち上げました。2013年度にはその立ち上げに関するレポート、2014年度には報告書をまとめ、研究の経過を示してまいりました。その後、2015年度には再度レポートを発行し、2016年度には次なる報告書をまとめ、この度、基盤研究レポート発行となった次第であります。この基盤研究には、これまで関係の皆様より様々なご意見やご指摘を受けると共に、その活動には所員のみならず多方面の研究者の方々にもサポートをして頂いております。所員にとっては、慶應義塾大学における体育研究所の使命と存在意義を再認識することのできる良い機会となっていることと感じております。

さて、昨年11月末から12月初旬にかけて、慶應義塾体育会および慶應義塾福澤研究センター主催において、慶應義塾体育会創立125年記念の特別展「近代日本と慶應スポーツ」が三田キャンパスにて開催されました。ご覧になられた方々も多いと存じますが、その冒頭、「身体健康精神活潑」という福澤諭吉の書が展示してありました。活発な知的活動の前提として、肉体を健康に保つことの重要性を強調したものと伺います。そして、この特別展のサブタイトルとなった「体育の目的を忘るゝ勿れ」が記された時事新報に掲載された福澤諭吉の体育についての論説も展示されていました。その他にも福澤精神を受け継いで歩んできた慶應義塾の体育の歩みが脈々と解説されていました。

大学における体育教育の必要性を念頭に置き、今一度、現代に合った教育の実践を模索していくことこそ重要であると感じた次第であります。

学問の場、そしてすなわち人格形成の場である大学における体育に課せられた責務とは何か、今後とも模索を続けてまいります。体育研究所の教育目標は、「未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生を育てる」。是非本稿をご一読頂き、皆様の様々な視点からご意見をお聞かせ頂ければ幸いに存じます。



慶應義塾体育会創立125年記念特別展に展示された福澤諭吉の書(右)

## FD 実践としての体育授業プログラムの在り方（その1）

### 「体育実技を通じたライフスキルの獲得に関する基礎的検討 ——ふりかえりの記述による質的検討——」

班長：村松 憲

班員：村山光義・板垣悦子・野口和行（以上体育研究所）・東海林祐子（慶應義塾大学総合政策学部）

本班は、これまで体育実技の実践を通じた学生の人間形成を支援していくために、自己効力感、社会的スキル、ライフスキル等の変数を用いて、その効果を検証してきた。しかし、ライフスキルは曖昧で包括的な概念であるために、具体的な目標を設定しづらい側面を持つ。さらに、体育授業では体育に対する好悪や事前のライフスキルの獲得レベルにも大きな差が見られ、受講者が持つ授業の達成目標も様々である。こうした多様なメンバーから構成される体育授業では、各自の目標に応じた工夫やしかけのある授業を構成することが必要となる。

このようなときに有効な学習方法の1つとして、体験学習法が挙げられる。体験学習は、①体験、②観察、③概念化、④仮説化 (hypothesis) というサイクルを繰り返すことによって、新たに学習した概念が、試行・修正・強化されていく過程である。そのうち、内省的な観察、概念化と一般化、仮説化の過程が一般的にふりかえりと称され、その重要性が指摘されている。

体育研究所で実施しているシーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」では、日記形式のふりかえりシートを授業で活用しており、質的なデータを継続して収集している。筆者らがこれまで行ってきた学生の成長に寄与する体育授業に関する調査研究では、量的データのみを扱っており、質的なデータを活用した体育科目を通じた学生の成長の要因を検討していない。

そこで、本年度は、「アウトドアレクリエーション」受講者を対象に、ライフスキルについて調査し、さらにテキストマイニングによる質的分析（図1参照）を行うことで、実習におけるどんな要素が学生のライフスキル獲得に寄与しているかを検討することを目的とした。

その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 5日間の実習を通して、ライフスキルのうち「コミュニケーション」、「ストレスマネジメント」、「体調管理」、「最善の努力」、「礼儀・マナー」、「責任ある行動」、「謙虚な心」、「感謝する心」の項目で有意な向上がみられた（表1）。

- 2) 「コミュニケーション」に関する項目が向上した要因として、様々な場面で、他者と密接に関わりながら活動するという経験が、「ストレスマネジメント」、「最善の努力」に関する項目が向上した要因として、様々なストレスに向き合い、成し遂げることで得た達成感が、「体調管理」に関する項目が向上した要因として、規則正しい合宿生活が、「感謝する心」に関する項目が向上した要因として、学生に直接関わってきたカウンセラーの存在、等がそれぞれ考えられる。
- 3) 非日常の環境の中で、様々なストレスに向き合い、それを達成するという経験と、その経験したことの意味をじっくり考え、ふりかえって言語化することが、曖昧で包括的な概念であるライフスキル全体の獲得に寄与している可能性が示唆された。

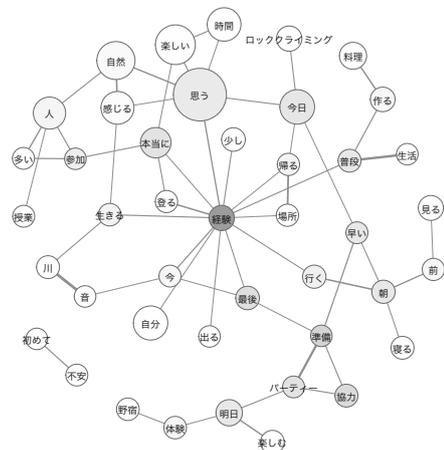


図1 ふりかえりシートの記述内容全体の共起ネットワーク

表1 実習前後におけるライフスキルの下位尺度の合計得点の平均値・標準偏差とt検定の結果 (N=16)

	PRE		POST		t 値
	M	SD	M	SD	
目標設定	10.44	2.66	11.38	3.03	1.64
コミュニケーション	10.19	1.87	12.56	2.37	4.54***
ストレスマネジメント	11.06	3.09	12.06	2.98	2.19*
体調管理	10.50	1.75	12.44	1.41	6.56***
最善の努力	11.31	2.15	12.69	1.78	3.56**
礼儀・マナー	12.94	2.21	13.75	1.48	2.15*
責任ある行動	11.63	1.96	13.13	1.89	2.91*
考える力	11.88	1.86	12.44	1.93	1.15
謙虚な心	10.50	1.83	12.19	1.94	3.34**
感謝する心	12.31	2.18	13.31	2.15	2.93*

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05

FD 実践としての体育授業プログラムの在り方（その2）

「大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的な動機づけに貢献するか？ ——大学体育における動機づけ雰囲気の検討——」

班長：山内 賢

班員：佐々木玲子・加藤大仁・永田直也・近藤明彦（以上体育研究所）

本班は、体育科目履修者の運動やスポーツに対する動機づけを高める方略として、授業における動機づけ雰囲気の影響を検討してきた。2013年度から始まった研究では、授業における熟達志向的雰囲気が履修者の運動やスポーツに対する内発的な動機づけに影響を与えている可能性が示され、この検証結果の妥当性を高めるための新たな尺度の作成を試みてきた。本年度は、2016年度に試作した尺度の再検討を行い、その結果を用いて授業における教師の指導・関わり方と動機づけ雰囲気との関係を調査した。

研究の始めとして、2016年度に試作した尺度の質問項目を研究班内で再検討し、語句の調整や新たな項目の作成を行い、20の質問項目からなる質問紙を作成した。作成した質問紙は、体育実技Aの個人種目、チーム種目を履修した学生に対して学期の初回授業と最終授業に配布した。学生には、質問項目が履修している授業に当てはまるかどうかを5件法（「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」）で選択させた。

初回授業の回答は、集計の後に回答に不備のあるものを除いて探索的・確認的因子分析を行った結果、「熟達志向的雰囲気」に関する因子と「成績志向的雰囲気」に関する因子の2因子構造にまとまった。加えて、最終授業の回答についても同様に確認的因子分析を実施した結果、初回授業と同じ結果が得られた。また、藤田・杉原が用いた課題関与的雰囲気と自我志向的雰囲気との相関関係を調べた結果、本研究の熟達志向的雰囲気と藤田・杉原の課題関与的雰囲気間の値が  $r > .55$ 、本研究の成績志向的雰囲気と藤田・杉原の自我関与的雰囲気間の値が  $r > .65$  であった。このことから、本年度作成した尺度は、大学生・大学教養体育において動機づけ雰囲気を測定することができる尺度となったと考えられた。

教師の指導・関わり方と動機づけ雰囲気の関係については、上記尺度と教師の指導・関わり方について教師自身が7段階で評価した内省報告を基に検討した。共分散分

析の結果、教師が授業中に学生に対して言語・非言語的に重要だと伝えている事柄や学生との関わり方が成績志向的雰囲気に影響を与えていることが示された。重要だと伝えている事柄については、技術の評価を「自己の能力の向上で評価するか他者との優劣で比較するか」が影響を与えていた。学生との関わり方については、「学生とどの程度積極的に関わるか」、「履修者のどの程度の人数と関わるか」が影響していた。これは、教師が履修者を自身の能力の向上によって評価すること、すべての履修者に対して関わりを持つとすることが、授業が成績志向的雰囲気になることを防ぐと示唆している。教師の中には、指導時以外は履修者と普段何気なく関わっている可能性もあるが、履修者の動機づけの観点からすると授業全体においてより意図的に関わる必要があることが改めて示された。

本研究では、教養体育に適した動機づけ雰囲気尺度の開発により、大学教養体育における教師の指導法・関わり方の評価に新たな視点を取り入れることができた。この尺度の作成によって本研究班の役割は一段落がついたが、今後も尺度の検証、履修者の動機づけが高まる指導法の検討を進めることで、教養体育を履修した塾生が生涯にわたって運動やスポーツ活動を継続し、豊かな人生を暮らすことができるよう支えていける研鑽を積む必要がある。

表 因子分析の結果

	初回授業		最終授業	
	熟達志向的雰囲気	成績志向的雰囲気	熟達志向的雰囲気	成績志向的雰囲気
私の上達した時にほめてくれる	0.769		0.700	
私たちが上達するための改善点を教えてくれる	0.758		0.741	
私たちが努力を評価してくれる	0.714		0.750	
私たちが上達するよう気にかけている	0.711		0.777	
技術が向上する練習を設定してくれる	0.687		0.677	
私たちが上達するための明確な目標を示してくれる	0.652		0.711	
私たち一人一人を評価してくれる	0.632		0.657	
私たちが一緒に活動してくれる	0.621		0.529	
失敗は上達するために必要だと伝えてくれる	0.607		0.539	
私が課題を克服した際にほめてくれる	0.598		0.668	
私たちの質問にいつでも答えてくれる	0.562		0.604	
私たちのできない点ばかり指摘する		0.841		0.804
私をほかの人と比較する		0.768		0.829
失敗すると責める		0.735		0.810
私たちが上手くプレーできないと落胆する		0.717		0.685
スポーツが出来る人とのみ関わる		0.683		0.799
私たちの能力を決めつけている		0.626		0.658
人によって態度を変えている		0.613		0.715
私たち一人一人をみていない		0.564		0.698
私の存在に気を留めていない		0.501		0.782
$\alpha$ 係数		0.696		0.700

## 学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ

## 「研究を通じた塾体育会の支援策～統計手法を用いた競技力推定～」

班長：石手 靖

班員：鳥海崇・坂井利彰・加藤幸司・須田芳正・吉田泰将・山内賢（以上体育研究所）

基盤研究 2 班は「学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ」というコアテーマの下に、体育会や関係組織に所属している所員によって構成されている。組織発足直後から「研究を通じた塾体育会の支援策」というテーマで研究を進めている。

2014 年度は「タレント識別手法の検討」というテーマで、体育会部員の体組成を測定して各競技の特徴を明らかにした。2015 年度は「マウスガード利用の実態調査」というテーマで、体育会部員に対してマウスガード利用実態のアンケート調査を実施した。この結果、米国を中心として欧米では、競技速度が低く体重も軽いため大きな怪我となりにくい子供や女子学生でさえもマウスガードの利用が浸透している一方、慶應義塾体育会では怪我が重症化しやすいためにその装着が推奨されるべき男子学生でもマウスガードは広く受け入れられているとはいえなかった。マウスガードの利用実態調査に関しては今後も継続的な調査と啓蒙活動が必要である。2016 年度は「統計手法を用いた競技力推定」というテーマで、大学スポーツの競技力（先行研究では「強さ」という用語も充てられている）の数値化を実施した。全国に 26 ある大学野球連盟を対象として過去 15 年間で平均した競技力を推定した。本年度も昨年度より進めてきた「統計手法を用いた競技力推定」をテーマに研究を進めてきたのでここに報告する。

背景として、慶應義塾体育会は現在 43 部という非常に多くの部から構成されており、これらの部が日夜切磋琢磨して大会に参加し、成績を残している。その一方で、表彰などの事由によりこれらの成績を評価する際、異なる競技間における成績の比較は簡単ではない。この理由として、各競技で連盟に加盟している大学数が異なるために例えば優勝するために必要な勝利回数が競技ごとに異なる場合や、地区によって競技力に差があるために例えば早慶戦で準優勝（敗北）、同じく関東大会でも準優勝、さらに全国大会でも準優勝というように優勝を対象とした表彰制度の場合は対象外となる場合があるためである。このような

場合、例えば年間の競技成績として対戦相手の情報とその勝敗数を利用し、数理統計手法を用いることでそのチームの競技力を数値化し、比較することができる。

ここで本レポートでは昨年度の研究内容を発展させる形で、大学野球のランキングを作成したので報告する。用いた手法は以下の通りである。対象としたチームは全国に 26 ある大学野球連盟の 1 部リーグに所属する全 187 チームである。東海地区大学野球連盟と九州地区大学野球連盟に関しては連盟の下にある各地区の 1 部リーグに所属するチームも対象としている。対象とした試合は 2017 年の春と秋に実施された各連盟主催のリーグ戦、春のリーグ戦優勝チームで争われる「大学野球選手権」、及び秋のリーグ戦優勝チームが参加する各地区予選とその予選突破チームで争われる「明治神宮野球大会」の各試合である。

計算手法として Elo レーティングの手法を用いた。これは国際サッカー連盟の女子国別ランキングなどで用いられている手法である。本レポートでは各リーグ戦の重み付けを  $K=32$  とし、連盟間によって争われる地区予選及び全国大会での重み付けを  $K=64$  とした。算出された結果については一覽性を高めるために偏差値に換算して示した。

本手法を用いた結果、各地区の 1 部リーグに所属する全チームの競技力を比較できるようになった。本結果は 2017 年度の試合のみを対象としているため、1 つの勝敗により算出される結果が非常に大きく変動する点に注意が必要である。今後は本手法で得られた結果についての妥当性について検証し、また他競技についても本手法を用いて競技力を数値化して、競技毎の成績の比較につなげていきたい。

なお、本研究は今後、基盤研究 2 班としてのテーマではなく、グループによる共同研究という形で推進していく。基盤研究 2 班としては今後いくつかの研究テーマを新たに議論し、新たなアイデアが生まれ次第、研究を推進させていきたい。

表 Elo レーティングの手法を用いて算出した全国 26 大学野球連盟 1 部リーグ所属チームのランキング一覧 (上位 100)

順位	偏差値	大学名	Elo レーティング	順位	偏差値	大学名	Elo レーティング
1	77.4	日本体育大	1763.9	51	56.6	関西外語大	1563.0
2	72.8	大阪商業大	1720.2	52	56.5	名桜大	1562.0
3	71.8	九州共立大	1710.5	53	56.4	東北学院大	1560.9
4	71.0	富士大	1702.2	54	56.2	東海大	1559.0
5	71.0	星槎道都大	1702.1	55	56.0	中京大	1557.7
6	70.6	福井工業大	1698.2	56	55.9	金沢星稜大	1556.9
7	68.9	九州産業大	1682.3	57	55.9	朝日大	1556.6
8	68.6	上武大	1679.5	58	55.8	和歌山	1555.4
9	67.3	国際武道大	1666.4	59	55.6	近畿大	1553.5
10	67.3	環太平洋大	1666.3	60	55.3	常葉大浜松キャンパス	1551.0
11	66.6	宮崎産業大	1660.0	61	55.0	鹿屋体育大	1547.5
12	65.7	仙台大	1651.1	62	54.9	奈良学園大	1547.3
13	64.7	創価大	1641.4	63	54.9	びわこ成蹊スポーツ大	1547.1
14	63.8	東海大北海道キャンパス	1632.6	64	54.8	法政大	1546.2
15	63.3	名城大	1628.3	65	54.8	東京国際大	1545.9
16	63.3	中部大	1628.2	66	54.5	広島修道大	1543.1
17	63.2	九州国際大	1626.9	67	53.9	旭川大	1537.1
18	62.8	日大国際関係学部	1623.3	68	53.9	福岡大	1536.8
19	62.7	東海九州大	1622.0	69	53.8	共栄大	1536.1
20	61.8	日本文理大	1613.4	70	53.7	鹿児島大	1535.7
21	61.5	大阪市立大	1611.0	71	53.7	岐阜経済大	1535.3
22	61.2	沖縄大	1607.6	72	53.7	沖縄国際大	1535.2
23	61.1	天理大	1607.0	73	53.7	石巻専修大	1534.9
24	60.8	立教大	1603.7	74	53.5	亜細亜大	1533.5
25	60.7	近大工学部	1602.9	75	53.3	北翔大	1531.6
26	60.6	関西大	1601.9	76	53.1	別府大	1529.6
27	60.5	静岡大	1600.6	77	53.0	東海大海洋学部	1528.5
28	60.2	東日本国際大	1598.4	78	52.9	長崎国際大	1527.9
29	60.0	桐蔭横浜大	1596.2	79	52.9	神奈川大	1527.4
30	59.9	東洋大	1595.0	80	52.8	三重大	1526.5
31	59.8	東農大北海道オホーツク	1594.5	81	52.6	関東学園大	1524.5
32	59.8	四国学院大	1594.3	82	52.4	青森大	1522.8
33	59.8	日本経済大	1594.3	83	52.0	大阪産業大	1519.1
34	59.7	慶應義塾大	1593.4	84	52.0	流通経済大	1519.0
35	59.6	白鷗大	1592.4	85	51.8	函館大	1517.2
36	59.5	京都学園大	1591.5	86	51.7	中央学院大	1515.9
37	59.4	立命館大	1590.7	87	51.5	久留米大	1513.6
38	58.7	筑波大	1583.8	88	51.4	宮崎大	1512.9
39	58.6	佛教大	1583.0	89	51.4	関西国際大	1512.9
40	58.3	関東学院大	1579.2	90	51.2	皇學館大	1510.8
41	58.1	京都産業大	1577.8	91	51.0	國學院大	1509.3
42	58.1	八戸学院大	1577.6	92	50.9	金沢学院大	1508.4
43	57.9	中部学院大	1575.6	93	50.7	広島経済大	1506.3
44	57.8	近大産業理工学部	1575.2	94	50.7	広島大	1506.2
45	57.5	岡山商大	1571.9	95	50.4	帝京大	1503.9
46	57.2	明治大	1568.7	96	50.4	九州保健福祉大	1503.8
47	57.0	東北福祉大	1566.8	97	50.1	熊本大	1500.1
48	56.8	高知工業大	1565.0	98	49.8	苫小牧駒大	1497.8
49	56.7	城西国際大	1564.4	99	49.7	中京学院大	1496.5
50	56.6	愛媛大	1563.3	100	49.6	東北公益文科大	1495.4

## 大学体育の教育理念とカリキュラム

### 「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」

班長：村山光義

班員：植田史生・奥山静代・永田直也・福士徳文・稲見崇孝（以上体育研究所）・佐藤正伸（文教大学）

本研究班のねらいは、現在、様々に語られている大学教育を取り巻く課題を系統的にまとめ、大学体育への課題として検証するとともに、慶應義塾の実情との関係にも考察を加え、今後の諸策を検討することである。これまで文献レビューによって体育・スポーツを探るとともに、大学体育の今後を見据えたシンポジウムを行ってきた。2017年度の活動のメインは昨年度に引き続き（公社）全国大学体育連合関東支部と連携した大学生の育成につながるシンポジウムの開催であった。

今回のシンポジウムでは、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを約3年後に控え様々なムーブメントが起きている今、東京大会が大学教育においてどのような機会となるのか、そしてその先にどう活かされるのか、オリンピック・パラリンピック教育とボランティアの観点から大学生をどう育てることができるのか、という内容について議論することとした。3名のシンポジストとテーマは、宮崎明世氏（筑波大学）「オリンピック・パラリンピック教育と日本における展開 ～東京2020に向けて、そしてそれから～」、二宮雅也氏（文教大学）「スポーツボランティア教育の展望」、稲見崇孝氏（慶應義塾大学体育研究所）「KEIO スポーツレガシー ～東京2020オリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を備えた人間育成プロジェクト【KEIO 2020 project】～」であり、ディスカッサントに竹市勝氏（国士舘大学・（公社）全国大学体育連合関東支部長）、コーディネーターは福士徳文氏（慶應義塾大学体育研究所）で行われた。

宮崎氏からはオリンピック・パラリンピック教育分野の観点から、現在の大学生たちにどのような影響を与えることができるのか解説を含め発表をいただいた。オリンピズムの根本原則、その実践例の1つとしての長野オリンピックで行われた一校一国運動等の紹介、さらに2020年東京大会に向けたオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの実際からその課題も示された。

次に、スポーツを「する」「観る」に加えて「支える」と

いう動きが活発化している中、「スポーツボランティア」の実際についても二宮氏から解説と課題を發表いただいた。ボランティア精神は本来自発的で自律的なものであるが、大学などで養成に取り組む事は大きな教育効果があること、ロンドンオリンピックのスポーツボランティアの事例と2020年東京大会に求められる実際的な課題など多岐にわたる話題が提供された。

続いて稲見氏からは体育研究所が中心となって進める【KEIO 2020 project】のねらいと進捗状況について報告があった。慶應義塾大学では2020年東京大会の事前キャンプ地として英国チームを受け入れることが決まっており、それに向けた学生ボランティア組織を立ち上げ、活動を開始している。そこに、学生の育成も意図し“生きる力”を備えた人材育成への方策を考慮しつつ、プロジェクトを成熟させていくねらいや、既に活動をしているポスターやパネル作製、実際のスポーツ観戦を通じたスポーツの理解の

### オリンピック教育とスポーツボランティア ～東京2020に向けた大学・教員・学生の関わり～

慶應義塾大学体育研究所・（公社）全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

期日：2017年12月2日（土） 15:00～16:30  
会場：慶應義塾大学日吉キャンパス 第4校舎B棟 12番教室  
対象：オリンピック教育、スポーツボランティアに関心のある  
大学関係者（教員・職員・学生）

#### シンポジストならびにテーマ

- **オリンピック・パラリンピック教育と日本における展開**  
～東京2020に向けて、そしてそれから～  
宮崎 明世（筑波大学）
- **スポーツボランティア教育の展望**  
二宮 雅也（文教大学）
- **KEIOスポーツレガシー**  
～東京2020オリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を備えた人間育成プロジェクト【KEIO 2020 project】～  
稲見 崇孝（慶應義塾大学体育研究所）
- **ディスカッサント**  
竹市 勝（国士舘大学・（公社）全国大学体育連合関東支部長）
- **コーディネーター**  
福士 徳文（慶應義塾大学体育研究所）

※参加費無料  
※事前申し込み不要

問い合わせ先

慶應義塾大学体育研究所  
〒223-8521  
横浜市港北区日吉4-1-1  
TEL: 045-566-1068  
E-mail: fukushi@keio.jp  
(担当：福士)  
URL: <http://ipe.hc.keio.ac.jp>

推進などについて説明がなされた。(図1、図2参照)

最後に今後の課題についてディスカッションが行われた。ディスカッサントの竹市氏からは、オリンピック・パラリンピック教育の推進が多くの大学で求められている中、体育分野のみならず大学の各学部が協力して展開する必要性が指摘された。また宮崎氏からは、大学こそ既定の学習指導要領に縛られない教育活動が展開できる可能性があり、大学への期待が大きいことも指摘された。一方、会場からは学生当事者としてボランティアの輪をどう広げるべきか、といった率直な質問が出された。これに対し二宮氏からは、「あなたの力が必要だ」というメッセージを伝えるとともにリーダーばかりでない共生モデルに多様な人材が集まる工夫が必要との意見をいただいた。なお、本シンポジウムの記録は2018年4月に別途冊子として発行する予定であり、詳細はこの記録集を参照いただきたい。

今回のシンポジウムはこれまでの「大学生の育成」という基本的な課題に立脚し、東京2020オリンピック・パラリンピックを契機とした多様な教育実践への具体的な方策をさぐるものであったが、実際にはまだその入り口にたどり着いた状況と言える。今後、さらにオリンピック・パラリンピック教育とボランティア活動を理解するとともに、【KEIO 2020 project】の推進とそれを通じた大学体育の教育モデルの発展を引き続き検討していきたいと考える。



福士氏 (コーディネーター)



宮崎氏



宮崎氏 (左) と二宮氏 (右)



稲見氏 (左) と竹市氏 (右：ディスカッサント)



図1 【KEIO 2020 project】の2017年の活動



図2 【KEIO 2020 project】の理念

# おわりに

近藤明彦 体育研究所基盤研究 座長

2017年度における各研究グループの展開は以下のようなものであった。

コアテーマ①の「FD 実践としての体育授業プログラムの在り方」のテーマのプロジェクトは次の二つの報告である。まず「体育実技を通じたライフスキルの獲得に関する基礎的検討-ふりかえりの記述による質的検討-」ではこれまで既成の質問紙等を用いて定量的にデータを処理する手法での検討を重ねてきたが、今年度は授業体験をふりかえりとして記述した内容を基に体験学習を通じた経験の質的検討の試みを行っている。そして授業内容の要素と学生のライフスキルの獲得との関連を明らかにしている。次に「大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的な動機づけに貢献するか?-大学体育における動機づけ雰囲気の研究-」では昨年度の研究成果で得られた教養体育において使用する動機づけ雰囲気測定尺度の作成に使用可能な語句・質問項目をもとに尺度の完成を試みた。そして教員の指導・関わり方と動機づけ雰囲気の関連についてその関連を調査した結果新たな知見を得ている。

コアテーマ②の「学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ」の2017年度の報告は、野球を対象としたチーム力について直接対戦をしていないチーム間の優劣について比較出来るよう数理統計的手法を用いた指数によって「強さ」を示すことを試みている。

コアテーマ③の「大学体育の教育理念とカリキュラム」は、昨年度に引き続き全国大学体育連合関東支部との共催で進めたシンポジウム「オリンピック教育とスポーツボランティア-東京 2020 に向けた大学・教員・学生の関わり-」の内容を報告している。2020年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックを控え、この大会が大学教育にどのような機会を与えるのかについて「オリンピック・パラリンピック教育と日本における展開 -東京 2020 に向けて、そしてそれから-」、「スポーツボランティア教育の展望」、「KEIO スポーツレガシー -東京 2020 オリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を備えた人間育成プロジェクト-」の3演題をもとにスポーツを「する」、「観る」に加え「支える」という観点から「スポーツボランティア」についてディスカッションされた内容をまとめている。

2017年度に基盤研究各研究グループではこれまでの研究の成果を基に、次年度以降どの様にプロジェクトを展開するかについて議論が成された。その結果コアグループ③は継続的に活動を続けることが確認されるとともに、コアグループ①の二つのプロジェクトとコアグループ②は2017年度でプロジェクトを終了し、それぞれ新たな体制での研究プロジェクトグループを展開していくことが確認された。2018年以降の各研究プロジェクトのこれまで以上の研究の展開が期待される場所である。

**編集後記** 慶應義塾大学体育研究所2017年度の基盤研究レポートが関係者の皆様のご協力により発行の運びとなりました。御礼を申し上げます。昨年発行した報告書以降の各研究グループの活動成果の概要が本レポートに掲載されています。皆様には、是非ご一読頂き、本レポートについて忌憚のないご意見・ご感想を頂戴し、今後の参考とさせていただきますと幸いです。

慶應義塾大学で2020年東京オリンピックの事前キャンプ地として英国チームを受け入れることが決まっておりますが、体育研究所では現在それに向けた学生ボランティア組織「KEIO 2020 project」を立ち上げ、活動を開始しています。塾生がグローバルな視点・価値観に触れる貴重な機会を実体験できるよう、体育研究所の所員はその環境づくりを進めています。

さらに、東京オリンピック・パラリンピックが開催される前年には、日本体育学会第70回記念大会が慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催されることが、昨年の学会総会にて正式に決定いたしました。日本体育学会は体育・スポーツ・健康科学に関する学術団体であり、その研究を促進するために1950年に設立された団体です。現在、体育研究所では大会組織委員会の立ち上げの準備に入っており、日本体育学会大会の成功に向けて活動しています。

今後も体育・スポーツを通じて、体育研究所に課せられた責務を十分に果たすべく、行動力に溢れた塾生を育てるとともに、社会に役立つ組織として今後も努力を重ねて参ります。

(奥山静代)

慶應義塾大学体育研究所 2017年度基盤研究レポート

発行日 2018年3月31日

慶應義塾大学体育研究所 Institute of Physical Education, Keio University

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL:045-566-1068 FAX:045-566-1089 <http://ipe.hc.keio.ac.jp/>